

博士論文要旨

論文題名：一七・一八世紀の日本儒学と明清考証学 ——東アジアにおける「共時的」な知的基盤の形成

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

セキ ウン

SHI Yun

本研究は、明清考証学との「共時的」な展開という視点より、一七・一八世紀の日本儒学思想の形成過程及びその特質を再考し、それを東アジア思想史の文脈のなかで改めて位置付け直すことを企図する。同時にこうした「共時的」な展開により当該期に形成された知的基盤の所在を明らかにする。

従来の思想史研究では、日本思想内部における潜在的な近代的思惟構造の存在をめぐる論争が続いていた。こうした一国史内部の読みを克服するため、東アジアの視点が用いられるものの、近世日本社会の特殊性に鑑みると、その有効性に疑問を呈する見解もあった。本研究では、こうした問題点を踏まえ、「明清思想史と日本思想史に対する総合的な把握」及び「近世東アジア思想世界における「時差」と「共時」との二点を留意し、一七・一八世紀の日本儒学に対する再考を行う。

本研究は、本論五章と序論・結論によって構成されている。第一章では、明代中期に勃興した理学・心学二派の論争及び、その渦中に起った「大礼議」という事件の思想史的意義に注目し、事件後に現れた「復古」と「考証」の二つの新動向を検討した。この二つの思潮の背後には、朱子学批判および原典回帰の問題関心が作用していた。かかる問題関心は一七・一八世紀東アジアにおける書籍と学知の移動を通じ、近世日本の学者にも共有されるようになった。これは日本儒学の「実証的」な性格の形成に影響を与えたほか、日本古学派の登場を準備していたのである。

第二章では、伊藤仁斎・東涯・蘭嶋三人の経書解釈に対する考察を通じ、古義学の問題関心の由来及びその思想形成の過程を明らかにした。また、その背後に、明代の経学研究に対する学習や受容の姿勢がどのように反映されているのかを確認した。

第三章では、「学塾」が学問・思想の「空間」として、学者個人ないし近世的学問集団（学派）の形成に与えた影響、また近世社会で果たした役割を明らかにした。

第四章では、これまでの章節で明らかにした一七世紀～一八世紀初期までの思想環境を踏まえ、近世思想史上、最も画期的な「事件」として描かれてきた徂徠学の理論構成や内容を、明清思想史との関係を整理しながら再検討を行い、東アジア思想史での再定位を行った。

第五章では、「反徂徠」という思想空間から一八世紀の学問世界に対する再考を行った。

当該期の徂徠学をめぐる一連の論争は、日本における儒学思想の刷新に可能性を提供したほか、実は東アジア思想史における共時的な知的基盤の形成を促す作用もあった。また、一九世紀に本格的に確立した日本考証学に思想土台を築いたのである。

以上の成果から、近世思想史研究における、東アジアという視点の有効性を再確認することが出来た。東アジア儒学総体の思想動向のなかで、徂徠学ないし日本儒学を捉えなおすことで、従来「日本特有」として捉えられた思惟構造や学説内容が、実は東アジア思想史全体の文脈から逸脱したものではなかったことが理解できる。これにより、近代的言説体系のもとで近世儒学を再構築する従来の思想史研究の「恣意性」や誤謬を一定程度回避し得たのである。